論　文

CLD 児童・生徒を支える持続可能なネットワークとは：CLD こどもワークショップの実践

山﨑　けい子・青木　由香・田上　栄子・山方　美乃

富山大学人文科学研究第 83 号抜刷
２０２５年９月

論　文

CLD[1] 児童・生徒を支える持続可能なネットワークとは：CLD こどもワークショップの実践

山﨑　けい子・青木　由香・田上　栄子・山方　美乃

1. はじめに

「外国籍年少者の為の学習環境デザイン：散在（非集住）地域型共生サポートの形を探る（平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助金）」では、外国籍年少者等周辺の、学校、保護者、地域ボランティア、行政などが集まり協力し合うことで、不足する支援の力を強め、相互に学び合いながらサポートの連携を結ぶより良い方法はないかと考えた。具体的には、翻訳教材を、多様なメンバー（学校教諭、地域ボランティア、保護者、留学生、日本語教師、国際交流員（CIR）、大学教員等）で制作した。この翻訳教材を軸に、富山県を包括する、ゆるやかなネットワーク[2] を形成させた。[3] 当時、このネットワークは盛り上がりを見せたが、最近はホームページやメール発信による年に数回の情報共有や、数年に一回程度の講演会開催などで細々と続いている状態であった。その間、ネットワークの構成メンバーもかなり変化している。

一方、山﨑（2024）にまとめたように、「杉山ら（2020）は、学校（フォーマルな環境）での学習ではない、インフォーマル学習に着目し、Brown & Duguid（2001）、Wenger（1998）、Willson（2010）などに立脚し、趣味を通した社会関係『趣味縁』を『ゆるやかな実践ネットワーク』」と呼んでいる。実践ネットワークとは、「同質的」ではない「異質的」な関係性で、「『互いに面識はないかもしれないが、実践を共有しているためコミュニケーションや知識共有が可能な人々のゆるやかな関係性』であるとする。その上で、デジタル時代のアマチュア写真家にインタビュー調査を実施し」、「『刺激的な隣人』や『不特定の観衆』が」、彼らの「興味の深まりに関与しているとする。『刺激的な隣人』とは『共同の作品制作はしないが、それぞれが自分の興味を追求している姿を撮り歩き会や SNS の投稿から目にすることができ、それが刺激になる他の写真家たち』であるとする。」

山﨑（2024）ではさらに説明を加える。「前述の富山のゆるやかなネットワークを考えてみると、このゆるやかなネットワークのメンバーは『趣味縁』としてつながっているわけでない

1）CLD とは Culturally Linguistically Diverse の略である。

2）「ゆるやかなネットワーク」とは、強制的な縛りはないが、何かを望む時にはつながることができる、出入り自由なネットワーク、と本研究では定義している。

3）詳しくは山﨑ほか（2009）（2011）を参照されたい。

が、同じ興味を持つ、自発参加（出入り自由）の集まりである。」「富山のどこの所属の誰なのか、ある程度知っている存在であるが、多様な（『異質的』）立場（学校教諭、外国人相談員、地域ボランティア、日本語教師、大学教員等）の人々である。」「CLD 児童・生徒支援という共通の興味 / 実践があり、その興味の種類や深さもそれぞれで」、「コミュニケーションや知識共有が可能な人々のゆるやかな関係性」である。「『実践ネットワーク』に近い特徴を持っている。」

本研究では、散在地域で細々と続いてきた旧ネットワークを、ゆるやかさを保ちつつ、「持続可能」でより活性化されたものへと変化 / 再構築するためには、どのような手立てが必要なのかを考察する。

1）「強制性のない、ゆるやかな関係性」と「持続可能なつながり」は、どのような実施形態で可能なのか。一定の会を開催するとしたら、頻度、活動時間はどれ位なのか。

2）ネットワークのメンバーは、ネットワーク間で、どのような「人工物（子ども支援活動に関する、情報、教材、指導の工夫など）」の共有を望んでいるのか。

3）それぞれの興味の深まりに関与するという「刺激的な隣人」とは、どのようなものを持つ、どのような人なのか。

以上の 3 点[4] から、考察を加えていきたい。

2. 事前インタビュー結果

山﨑（2024）で既に詳述したように、本研究の皮切りとして、旧ネットワークを再構築する手立てを探るために、富山の CLD 児童・生徒を支援する人々へのインタビューを行った。その結果、「教える人たちのネットワーク」「教え合いや情報交換の場」などのニーズが認められた。この結果を踏まえ、CLD 児童・生徒支援に興味のある人を集めた、Web 会議システム（Zoom）での「CLD こどもワークショップ」を開催することにした。

3.CLD こどもワークショップの概要

CLD こどもワークショップは、これまでに 4 回、2023 年 8 月 19 日、2024 年 2 月 18 日、8 月 11 日、2025 年 2 月 2 日に開催した。

初回は、事前インタビューの結果概要を一つ目のテーマにした。富山の CLD 児童・生徒の支援者へのインタビュー結果は、何よりワークショップ参加者と共有すべきものであると考え

4）本研究は当初、「不特定の観衆」に「人工物」を可視化させ、より多様な人からのフィードバックを得ることが、ネットワークの拡充につながるという仮説も立てていた。しかし現在（2025 年 1 月末）、「人工物」を多くの人に公開して共有する、という段階にまでは至っていない。発表者の大半が、ワークショップ参加者内での共有を許可している段階である。

たからである。二つ目のテーマは、事前インタビューで求められていた教材情報とした。特にインターネットで入手可能な教材情報に辿り着けていない人が多かったのでそれを紹介することにした。

2 回目以降のテーマや発表者は、参加者[5] に事後アンケートで扱って欲しいテーマを尋ね、自薦他薦でテーマに関する発表者を募った[6]。事後アンケートでは、テーマに関して回答があったが、それに関して発表出来る人は出てこなかった。そのため、コアメンバー[7]で、事後アンケートであげられたテーマ、事前インタビューで出たテーマから、多様な参加者の多くが興味関心を持ちうるものを選択し、そのテーマに関して参加者で発表できる人を探した。研究を進めるにあたって、コアメンバーはこれまでの知見[8] から、持続可能なワークショップとするためには、外部に何かを求めるのではなく、自分ごととして、自分たちの課題を自分たちで話し合い、自分たちで解決の方向性を探ることが重要で、ネットワークに関わる者の活動の推進力となるという仮説があった。それ故、身近に発表者がいることを優先して[9] テーマを決定した。

その概要は以下の通りである。

第 1 回 CLD こどもワークショップ

2023 年 8 月 19 日（土）13:00-14:00　参加者（25 名）アンケート回答（18 名）

内容：インタビュー結果概要（山﨑発表）

　　ネットで入手可能な日本語教材の紹介（コアメンバー 1 名発表）

　　→全体での質疑応答

第 2 回 CLD こどもワークショップ

2024 年 2 月 18 日（日）13:00-14:30　参加者（18 名）アンケート回答（7 名）

内容：指導記録の紹介（コアメンバー 2 名、参加者 1 名発表）

　　→小グループに分かれての話し合い（自分の指導記録の紹介）

　　→小グループで話した内容を全体で紹介→全体での話し合い

第 3 回 CLD こどもワークショップ

5）ワークショップに 1 回でも参加したことがある人を、参加者と呼ぶ。

6）3 回目以降のテーマと発表者は、LINE でも尋ねたが回答はなかった。LINE の導入については 7. で詳述する。

7）コアメンバーとは、本研究の研究協力者のことである。本研究を進めるにあたり、研究環境を整える、進み方を考え評価する、データ記録のサポートをする人が必要で、研究協力者を 3 名お願いした。3 名は本稿の共同執筆者でもある。

8）これまで外部の実践者を招いて開いてきた、いくつもの講演会のアンケート結果で、素晴らしいことはよく分かったが、今の自分の現場で実践するには条件が異なりすぎるという感想が多くあった。

9）外部講師を招待するための恒常的な財源がないという現実的な問題もあった。

8 月 11 日（日）13:00-14:30　参加者（17 名）アンケート回答（10 名）
内容：漢字学習の紹介（参加者 1 名、外部関係者 1 名発表）
　　→小グループに分かれての話し合い（自分の行う漢字学習の紹介）
　　→小グループで話した内容を全体で紹介→全体での話し合い
第 4 回[10] は、4. で示すようにデータ外とした。

4. 分析データの範囲

ワークショップを考察するにあたり、Google フォームで作成した各回の「CLD こどもワークショップ事前申込[11]」、「事後アンケート」をデータ化した。また 2 回目以降に立ち上げた LINE のグループトークの内容もデータとして援用した。

「事前申込」は参加者の人数や属性を把握するため、「事後アンケート」はワークショップの評価をするため、また、特定の参加者の変化を追うために分析した。なお、事後アンケートに書かれている内容を明確に把握するために、ワークショップの音声データを参照した。LINE は、投稿数や内容などを分析した。

分析に時間を十分にかけるため、事前申込、事後アンケートは第 3 回までをデータとした。LINE は 2025 年 1 月末までをデータ範囲とした。

5. メンバーの人数・属性（事前申込）

事前申込では、まず、名前[12]、所属、住所[13] を尋ねた。

3.CLD こどもワークショップの概要で示したように、各回の事前申込によると、第 1 回の参加者は 25 名と想定を少し上回る人数が参加したが、その後は 18 名、17 名と一定の人数に収まっている。3 回全てに参加した者はコアメンバーを除くと 5 名である。1 度だけの参加者は 17 名おり、自分たちが興味のあるテーマの回に、出入り自由に参加していることがわかる。「ゆるやかなネットワーク」の性格が持続されているといえる。

事前申込には、「これまで、CLD 児童生徒への指導経験、講座等の受講経験があれば、具体的にお書きください。未経験の場合は、なしとお書きください。」という項目もあった。ワークショップの発表者に参加者情報を伝え、発表内容をより適切なものとするための項目である

10）参考までに概要を示す。2025 年 2 月 2 日（日）13:00-14:30 内容：学校教科書を使った日本語指導（参加者 1 名発表）
11）以下、「事前申込」と記す。
12）名前を尋ねているのは、「調査協力のお願い」、お願いに関する「承諾書」を送付するためである。
13）住所を尋ねているのは、同じく「調査協力のお願い」、お願いに関する「承諾書」を送付するためである。

が、これをみると、各回のワークショップにさまざまな立場の人が参加しているのがわかる。小中学校で CLD 児童生徒に教えている人（教諭、外国人相談員等）、国際交流に関わる行政の人、地域ボランティア、日本語教師、大学教員、大学生などがいる。また、興味関心はあるが実際にはまだ教え始めていない人もいる。旧ネットワークの特徴を引き継ぎ､多様な（異質的）立場の人たちが参加しているという性格も保たれている。

6. アンケート結果

事後アンケート項目は 1 回目で 9 項目：1）2）3）4）5）6）7）8）9）[14]、2 回目以降は 7 項目：4)’ 4)” 5）6）7)’ 8）9）であった。 7）7)’ を除き、各項目には選択肢が示され必須回答としている。2）3）7）7)’ 以外はその理由や内容を任意回答で尋ねている。

3.CLD こどもワークショップの概要で示したように、アンケート回答数は 1 回目 18 名（18/25=72.0%）、2 回目 7 名（7/18=38.9%）、3 回目 10 名（10/17=58.8%）である。1 回目が非常に高い回答率で、2 回目が低くなり、3 回目で盛り返している[15]。

実際のアンケートの順番とは異なるが、各項目の内容と回答結果を示しながら分析をしていく。なお、理由や内容で文章が記入されているものは、個人が特定されないようにするため、書かれた内容をカテゴリーに分類し、ラベル化したものを示す。また、ラベル化の理解を助けるために、太字でカテゴリーを示したもの、あるいは（　）内に実際に書かれた内容を簡略化して加えたものもある。

6.1 ワークショップのやり方：会の実施形態、頻度、活動時間等

第 1 回事後アンケートのみで尋ねた、このワークショップのやり方に関するアンケート項目と結果を示す。アンケート回答者数が、参加者 25 名中 18 名（72.0%）なので、大方の意見が反映されていると考えて良いだろう。

1）このような Zoom で開催するワークショップをどう思われますか。（必須回答）
その理由をお書きせください。（任意回答）

14）9）今日のワークショップの内容を、今後ご自身の実践に活かせそうですか。（必須回答）
その理由をお書きください。（任意回答）
という内容であったが、本稿の目的からは外れるため分析対象としない。

15）この理由ははっきりとは分からないが、ワークショップの最後にアンケート記入依頼をしたが、1 回目は強く記入を求め、その後は軽く依頼しただけだったことが関係しているかもしれない。

表 1：Zoom 開催

とても良かった	11 人（61.1%）
普通	7 人（38.9%）

選択肢は 3 つあったが、「あまり良くなかった」の選択肢は選ばれていない。

理由が書かれていたのは 8 件で、書き入れた人の選択肢と照合させると、＜とてもよかった＞が 6 件で、＜普通＞が 2 件であった。

表 2：Zoom 開催の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「場所確保と移動の大変さがない」**4 件** 「たくさんの人と学び合える」 「（とてもよかったが）事前の資料配布が欲しい」
＜普通＞	「直接会う機会も欲しい」 **その他** Zoom 開催とは直接関係のないもの

＜とてもよかった＞の理由を見ていくと、富山に散在する子ども支援者の、地理的かつ時間的な問題が解決できるようにと考えた、コアメンバーの意図と合致している。Zoom 開催を続行して問題はないと分析した。

ただ「直接会う機会も欲しい」が 1 件あった。もしこのような声が高まれば考え直すこともあろうが、3 回までのアンケートにそのような声はあがってきていない。

2）今後、このようなワークショップはどの位の頻度で行ったら良いでしょうか。
何か月に 1 回程度が適当だと思われますか。下に数字をお書きください。（必須回答）

表 3：頻度

6 ヶ月に 1 回	12 人（66.7%）（うち 1 人は 6 ヶ月か 12 ヶ月に 1 回）
3、4 ヶ月に 1 回	5 人（27.8%）
2 ヶ月に 1 回	1 人（ 5.6%）

大半の人が 6 ヶ月に一回を選んでいる[16)]。

3）今後、このようなワークショップはどの位の時間が必要だと思いますか。（必須回答）

表 4：時間

60 分	8 人（44.4%）
90 分	7 人（38.9%）
120 分	3 人（16.7%）

16）これは事前インタビュー結果と合致する。

この結果の分析は迷うところではあるが、90 分と 120 分を足すと 10（55.6%）となり、60 分では短いと感じている人が過半数であるととらえることもできる。ただ 120 分は一番少数派なので、90 分での開催となろうか。

第 1 回では、ワークショップ全体への参加態度への評価も尋ねた。

4）今日のワークショップに、ご自身は積極的に参加できましたか（言いたいこと、聞きたいことを話せましたか）。（必須回答）

その理由をお書きください。（任意回答）

表 5：積極性

	とてもよかった	普通	あまりよくなかった
第 1 回	2 人（11.1.%）	10 人（55,6%）	6（33.3%）

＜とてもよかった＞ 11.1%、＜普通＞ 55.6%、＜あまりよくなかった＞ 33.3% となり、＜普通＞が多い。

理由を書き入れたのは 6 件で、書き入れた人の選択肢と照合させると、＜普通＞が 2 件、＜あまりよくなかった＞が 4 件であった。

表 6：積極性の選択肢別理由

選択肢	理由
＜普通＞	「発言するのが簡単ではなかった（教えた経験がない）」 「発言するのが簡単ではなかった（何を話せばいいか分からない）」
＜あまりよくなかった＞	「時間が不足している」２件 「発言するのが簡単ではなかった（zoom に慣れなかった）」 「個人的な理由で発言できなかった（他の作業をしながらの参加）」

理由が書かれていたのは、積極性の高くない選択肢ばかりだった。また、理由の内容が具体的で、参加者の発言するのが難しかった様子が読み取れる。時間が不足していた上に、第 1 回の参加者は 25 名で、大人数を前にして、Zoom 会議という初めての不慣れな場面で発言しにくかったのだろう。

第 1 回のワークショップの形態が、全体での活動しか行われなかったこと、時間も 60 分で短かったことに問題があった[17] といえよう。

アンケート結果等を踏まえコアメンバーで話し合い、2 回目以降のワークショップは形態等を変更した。具体的には、頻度は半年に一回で変えず、時間を 1 時間半に設定し直し、小グループ（ブレイクアウトルームによる 4 名ほどのグループ）に分かれての話し合いを入れた。

17）実際にコアメンバー内でも、初回の 1 時間という時間設定（実際には 10 分程度延長）では、意見交換がほとんどできなかった、という反省をした。

最初の発表者による全体への説明（20 分）の後、ブレイクアウトルームに分かれて少人数での活動（40 分）を行うようにした。小グループでの活動は、発表者の内容を振り返る、自分たちの取り組みを紹介し合う、課題を考える、などである。その後、小グループで発表した内容を全体に報告する（20 分）という時間も設けた。

またさらに、2 回目以降は LINE のグループも立ち上げ、ワークショップ以外の日々の情報交換の場も設定した。

6.2 小グループ（ブレイクアウトルーム）活動

このような小グループ活動を取り入れたことが参加者にどう捉えられたのか、その評価を事後アンケートから探る。

前述した 1 回目の 4）の項目は、2 回目以降、4)’、4)“に分かれた。

4)’ ブレイクアウトルームに分かれた話し合いはいかがでしたか。（必須回答）

その理由をお聞かせください。（任意回答）

表 7：小グループでの活動

	とてもよかった	普通	あまりよくなかった
第 2 回	3 人（42.9%）	2 人（28.6%）	2 人（28.6%）
第 3 回	4 人（40.0%）	5 人（50.0%）	1 人（10.0%）

特に第 3 回は＜あまりよくなかった＞の割合が少ない。

第 2 回の理由は 5 件で、書き入れた人の選択肢と照合させると、＜とてもよかった＞3 件、＜普通＞1 件、＜あまりよくなかった＞1 件であった。

表 8：第 2 回目小グループでの活動の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「『実践の様子』が話されたこと」 「『実情』が話されたこと」 「『見過ごされがちな困りごと』が話されたこと」
＜普通＞	「小グループにする必要はなかった」
＜あまりよくなかった＞	「小グループのメンバーの問題（小グループの中に支援している人が少なかった）」

小グループが評価されている一方、批判的な意見もあった。

第 3 回の理由は 10 件で、書き入れた人の選択肢と照合させると、＜とてもよかった＞4 件、＜普通＞5 件、＜あまりよくなかった＞1 件であった。

表 9：第 3 回目小グループでの活動の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「現場の要求が聞けた」 「個々の子どもに合わせた柔軟な指導の再確認」 「疑問の解消」 「気づき」

＜普通＞	「少人数で意見交換しやすかった」 「各自の使用教材の紹介ができた」 「もっと時間をかけて」２件 「内容と方法の相違（どの漢字を教えるかとどのように教えるかの違いを考えるべきだ)」
＜あまりよくなかった＞	「小グループのメンバーの問題（小グループの中に支援している人が少なかった)」

＜とてもよかった＞と回答している人は様々な理由をあげてプラスの評価をしている。＜普通＞はプラスの理由をあげるものがある一方､「もっと時間をかけて」などの要望も 2 件あった。

2、3 回目と、小グループの話し合いの中で、個別の事情が語られ、学びが深まっている様子が窺える。ただ、小グループ内のメンバーに問題があると言及する者、小グループ活動そのものに否定的な者もいた。特に 3 回目は時間がまだ不足していると感じた者もいた。小グループの作り方などに改善の余地があるだろう。

さらにブレイクアウトルームへの参加態度を尋ねた。

4)”ブレイクアウトルームでの話し合いに、ご自身は積極的に参加できましたか（言いたいこと、聞きたいことを話せましたか)。(必須回答)

その理由をお聞かせください。(任意回答)

表 10：小グループ活動での積極性

	とてもよかった	普通	あまりよくなかった
第 2 回	3 人（42.9%）	3 人（42.9%）	1 人（14.3%）
第 3 回	7 人（70.0%）	3 人（30%）	0 人（0.0 %）

表 4 の第 1 回に比べ、第 2 回、第 3 回とも「あまりよくなかった」が減っている。第 3 回は「とてもよかった」が 70% になり、「あまりよくなかった」は 0.0% になっているのは特筆すべきである。

第 2 回の理由は 3 件で、書き入れた人の選択肢と照合させると、＜とてもよかった＞ 2 件、＜あまりよくなかった＞ 1 件であった。

表 11：第 2 回目小グループ活動での積極性の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「方向性を整理できた」 「ファシリテータの適度な答えやすい声掛け」
＜あまりよくなかった＞	「体調で途中退出」

第 2 回は理由を述べているものが少なかった。なお、ファシリテーターとは、各グループに研究協力者を入れ、録画と話し合いがスムーズに進むよう黒子的役割を依頼したが、その人を称したようである。

第 3 回の理由は 10 件で、書き入れた人の選択肢と照合させると、＜とてもよかった＞ 7 件、＜普通＞ 3 件であった。

表 12：第 3 回目小グループ活動での積極性の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「必要に応じて発言」 「少人数で意見交換しやすかった」 「ファシリテーターの適切な話題の振り方」 「関心のあるテーマ」 「自分の実践を話せた」 「感想や疑問を話せた」 「（大学の先生から）入試の採点基準や漢字の必要性を聞けた」
＜普通＞	「内容に新鮮味がなかった」 「自身の準備不足」 「まだ情報収集の段階」

＜とてもよかった＞の最初の 3 件は、小グループ内の話し合いが活発であったことを評価するものであった。次の 3 件は、話し合いの深まりを示唆するものであった。＜普通＞ 3 件は、それぞれの事情や捉え方を示していた。

2、3 回と、やはり小グループ内での話し合いが順調に進み、思考が深まっていることが示されている。まだ多少の問題はあるものの、概ね、小グループでの活動は参加者の前向きな態度で意味のある活動になっているといえよう。

ワークショップ全体に対する評価も尋ねた。これは実際のアンケートでは、最後に尋ねた項目であった。

5）今日のワークショップ全体に対する評価をお聞かせください。
その理由をお聞かせください。（任意回答）

表 13：全体評価

	とてもよかった	普通	あまりよくなかった
第 1 回	10 人（55.6%）	7 人（38.9%）	1 人（5.5%）
第 2 回	2 人（28.6%）	3 人（42.9%）	2 人（28.6%）
第 3 回	5 人（50.0%）	5 人（50.0%）	0 人（0.0%）

＜普通＞を選ぶ割合が徐々に上がっている。＜あまりよくなかった」＞とする者が、第 3 回ではいなくなったのは、注目すべきであろう。

理由が書かれていたのは、第 1 回目は 10 件で、＜とてもよかった＞が 5 件、＜普通＞が 5 件であった。第 2 回目は 4 件で、＜とてもよかった＞が 2 件、＜普通＞が 1 件、＜あまりよくなかった＞が 1 件であった。第 3 回目は 10 件で、＜とてもよかった＞が 5 件、＜普通＞が 5 件であった。

第 2 回目の＜あまりよくなかった＞1 件は、「自己都合で途中退席したため」であったが、そのほか、この項目の理由は、ワークショップに関わる様々な観点から述べられていた。「内容がよかった」、「多様な人たちとつながれたことを評価」などすでに他の項目で書かれていたことの繰り返しがあった。マイナスの評価も「内容が役に立たなかった」「ワークショップのやり方がよくなかった」など、やはり他項目の繰り返しがあった。そのほか、「ワークショップ開催へのお礼」、「富山の子ども日本語教育の方向性や仕組みづくりを示して欲しい」という感想や要望なども書かれていた。あまりに幅があり過ぎて、「理由」を分析するのは難しかった。

以上、分析を重ねたが、概ね、好評あるいは及第点と捉えてもよかろう。Zoom で開催する、小グループ活動も加えた、半年に一回、90 分の形態でのワークショップが、とりあえず一定の評価を得ていると考えて良いだろう。

6.3 内容：どのような「人工物」の共有を望んでいるのか

6.3.1 実際に扱われたテーマ

インタビュー結果や、事後アンケートから出たものから、コアメンバーが多様な参加者の多くが興味関心を持ちうるものとして選んだテーマに対する評価を見ていく。

6）今回の内容はいかがでしたか（必須回答）

その理由をお聞かせください。（任意回答）

表 14: 内容評価

	とてもよかった	普通	あまりよくなかった
第 1 回	14 人（77.8%）	3 人（16.7%）	1 人（5.5%）
第 2 回	2 人（28.6%）	3 人（42.9%）	2 人（28.6%）
第 3 回	2 人（20.0%）	8 人（80.0%）	0 人（0.0%）

第 1 回は、山﨑が前年度に行った「インタビュー結果概要」、「ネットで入手可能な日本語教材の紹介」と 2 つのトピックがあったからか「とても良かった」を選ぶ者が 80% 近くになった。その後は第 2 回「指導記録の紹介」、第 3 回「漢字学習の紹介」と、「普通」を選ぶ割合が高くなっていくが、第 3 回は「あまりよくなかった」が 0% になった。

第 1 回では、理由が 11 件書かれている。＜とてもよかった＞が 10 件、＜普通＞が 1 件であった。

表 15：第 1 回目内容評価の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	テーマについて 「わかりやすかった」２件 一つ目 「教育現場の意見を知れた」 「教育活動を大切にしている」 二つ目 「ネット上の教材が参考になった」２件 「ネット上の教材が参考になったが、教え方の情報も欲しい」 子どもの言語習得について 「9 歳頃から抽象的思考ができること」 「中学年からの抽象的な内容の教え方」、「教科指導での語彙や文法指導の工夫」 「学齢に応じた教材と支援の実際」
＜普通＞	「教え方の情報も欲しい」

＜とてもよかった＞の理由は、全般にかかわるもので、「わかりやすかった」が 2 件であった。一つ目のテーマについては 2 件、二つ目は 3 件それぞれ理由の記載があった。なお、ネット上の教材を紹介する際に、前提として、子どもの言語習得に関する説明があったのだが、それについて 3 件が＜とてもよかった＞としている。

第 2 回で理由が書かれたのは 4 件である。＜とてもよかった＞が 2 件、＜普通＞が 1 件＜あまりよくなかった＞が 1 件であった。

表 16：第 2 回目内容評価の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「生の声が聞けた」 「それぞれの取り組みからの気づき」
＜普通＞	「途中参加であったから」
＜あまりよくなかった＞	「例が少ない。他所の例が欲しい」

2 回目は回答数が少なく、それぞれの立場から理由が書かれている。

第 3 回では 10 件の理由が書かれている。＜とてもよかった＞が 2 件であった。＜普通＞が 8 件であった。

表 17：第 3 回目内容評価の選択肢別理由

選択肢	理由
＜とてもよかった＞	「漢字圏と非漢字圏の、漢字の認識の違いに気づけた」 「現場の実態が聞けた」
＜普通＞	**発表者について** 「（前半の発表者）具体的な指導の工夫が聞けた」、「（後半の発表者）具体的な活用の仕方を知りたかった」 「（後半の発表者）漢字の成り立ちを踏まえた学習の方が子どもの理解が深まる」 「（後半の発表者）具体的な練習帳の仕組みや使い方を知りたかった」 「（後半の発表者）子どもの日本語学習から離れた内容」 **ワークショップ全体について** 「時間不足」 「参考にするものがなかった」 「議論が絞れていない」 「初めての参加で評価できない」

＜普通＞ 8 件は、発表者 2 人の両方に言及するもの、後半の発表者に言及するものがあった。「具体的な練習帳の仕組みや使い方を知りたかった」が合わせて 2 件出てきた。＜普通＞を選びながら内容に否定的なものが 3 件、「時間不足」「参考にするものがなかった」「議論が絞れていない」があった。

理由の内容を詳しくみていく。

1 回目で、わずかに触れられた、言語習得に関する知識に 3 件が＜とてもよかった＞の評価が集まっていた。前提となる学術的な知識にもニーズがあるといえるだろう。

3 回目に関しては、全体的に、内容に関心を寄せつつも、そのやり方や捉え方にも踏み込んで理由が述べられている。その他、時間が不足していた、後半の紹介していた漢字の練習帳の使い方を知りたかったという指摘もある。

実際に、自作の漢字練習帳を紹介した後半の発表において、練習帳の使い方にまではほとんど時間が割けていなかった。筆者は後から、発表者が、自作の練習帳の使い方まで発表する予定であったが時間が不足しそこまでいけなかったと聞いた。限られた時間をどう使うか、今後の課題となる[18]。

いずれにせよ、参加者は、設定されたテーマに及第点は与えているが、問題点も指摘している。

6.3.2 参加者がワークショプで扱って欲しい内容

それでは、参加者は、本当はどのようなテーマを望んでいるのか、事後アンケートの次の項

18）第 4 回は発表者を一人としたので、時間不足は解消されるだろう。

目を見ていく。

1 回目は次のような項目であった。

7）今後、このワークショップで扱って欲しい内容があればお書き下さい。またご自身が提供できる内容があればそれもお書き下さい。（任意回答）

2 回目以降、ワークショップをどう運営したいかという意図を説明し、より具体的な内容とした。

7)’今後このワークショップでは、どなたかからの話題提供を中心に回していきたいと考えています。日頃の実践や悩みをみんなで考えていきましょう。どんな小さなことでもいいです。ご自身が提供できる話題、内容があれば教えてください。（最後に必ずお名前をお書きください。）

第 1 回目は 6 件、第 2 回目は 7 件、第 3 回目では 10 件回答されていた。

表 18：扱って欲しい内容

回数	内容
1 回目	**学習に関すること** 「教科学習の問題点」 「それぞれの子どもにあった指導法」 「教材紹介、実践例」 **その他** 「小グループでの話し合い（現場で困っていること、交流）」２件 「県全体のサポート体制」
2 回目	**学習に関すること** 「語彙力向上」 「モチベーションのあげ方」 **学習の周りにあること** 「学級担任に望まれること」 「高校進学のサポート」 「なし」３件
3 回目	**学習に関すること** 「家庭学習の定着」 「デジタル教材の使い方」 「集中力が継続しない子の対応」 「学びに積極的になってもらえる接し方、教室運営の仕方」 「テキストの日本語と子供たちが実際に使っている方言とのギャップの埋め方」 **その他** 「ネットワーク的な組織の情報」 「なし」４件

まず、1 回目より、文言を変えた 2 回目以降の方が、より具体的な焦点が絞れている内容になっているといえる。

また、1 回目のこの項目にも、小グループでの話し合いを望むものが 2 件出ており、2 回目以降の小グループ活動の追加という改善につながっている。

全体的には、学習に関することが多く望まれている。「教材紹介、実践例」「デジタル教材の使い方」「教科学習の問題点」などは実際にテーマとして取り上げており、これからも取り上げられるだろう。学習に関するテーマは発表者も探しやすい。

一方、「モチベーションのあげ方」「それぞれの子どもにあった指導法」「集中力が継続しない子の対応」「学びに積極的になってもらえる接し方、教室運営の仕方」などには集約できる答えはないだろう。それは学習に関することでも同様のことが言えるだろうが、学習内容という軸があるものとは違い、一人ひとりの子どもの多様性に寄り添うことがより必要になる。多様な状態、背景を見極める力が求められ、それに対応する手段を豊富に持っているかが鍵になるだろう。そういう個々のケースを語り合うことは可能だろうが、個々の試みを共有し、どのように自分たちそれぞれの課題に結びつけられるかは、参加者の捉え方にかかっているだろう。

加えて、「語彙力向上」「家庭学習の定着」「テキストの日本語と子供たちが実際に使っている方言とのギャップの埋め方」などは、そのことに注力して活動している人がいるかどうかであろうが、やはり日々の指導の中で小さな工夫をしている指導者は多いだろう。そのような小さなものを掘り起こしワークショップ内で共有するには、小さなことの中にも多くの共通する部分 / ヒントがあり、それらを価値あるものとして参加者が捉えられるかであろう。

学習の周りにあることも、今後取り上げられる可能性がある。「高校進学のサポート」「学級担任に望まれること」のうち、特に「高校進学のサポート」は富山県の他の団体で既になされているが、義務教育ではないところにいかにつなげられるかは、多くの問題を抱える課題であり、複数の箇所で何度扱っても良いテーマだろう。

その他、「県全体のサポート体制」「ネットワーク的な組織の情報」も、誰か発表者として適切な人が見つかれば扱われる可能性はあるだろう。

結果として、参加者がワークショップで扱って欲しい内容の大半は「学習」に関する情報や、指導 / 学習の工夫である。日々の子どもたちとの接触の中でぶつかる課題を乗り越えたいというニーズが見えてくる。しかしながら、具体的には多様なテーマがあげられており、参加者達の興味関心の幅が広いことがわかる。このような多種多様なものから一つ選んだ場合、参加者が自分ごととして捉え直す積極的な態度があるかどうかが、ワークショップの評価に関わってくるだろう。回を重ねるごとにこのワークショップの性質が理解されれば、参加者の参加態度も熟成されるだろう。

しかしながら、参加者に多くを望むのは方向性が違うだろう。だからこそ、「ゆるやかなネッ

トワーク」つまり、「強制的な縛りはないが、何かを望む時にはつながることができる、出入り自由なネットワーク」であることが望まれるのではないだろうか。自分の興味のあるテーマの時につながれば良いのである。

6.4「刺激的な隣人」：触発されたことはあるか。

ワークショップ内で、他の人の発言から「触発されたこと」があるかを尋ねた。前述の「刺激的な隣人」を置き換えた[19] 言葉である。

8）今日のワークショップ内で、他の方の発言に、触発されたことはありましたか。（必須回答）その内容をお書きせください。（任意回答）

表 19：触発性

	はい	いいえ
第 1 回	13 人（72.2%）	5 人（27.8%）
第 2 回	4 人（57.1%）	3 人（42.9%）
第 3 回	8 人（80.0%）	2 人（20.0%）

「はい」の回答が、第 1 回は 72.2%、第 3 回が 80% と高い。第 2 回は少し落ち込んでいるが、それでも「はい」の回答は過半数である。

第 1 回の理由が書かれていたのは 5 件で、全て＜はい＞を選んだ人であった。

表 20：1 回目の触発性の選択肢別内容

選択肢	理由
＜はい＞	**発表者の内容** 「オンライン指導のメリット・デメリット」 「ICT の活用」 **コアメンバーである参加者の発言** 「易から難の文型積み上げは子供では行わない」 「文法は体系的にではなく、必要な時に適宜教える」 **その他** 「色々な立場の人」

19）置き換えには、アンケート項目の問いとして馴染みやすさを優先させる、という意図があった。

2 回目は 4 件で、＜はい＞が 3 件で＜いいえ＞が 1 件であった。

表 21：2 回目の触発性の選択肢別内容

選択肢	理由
＜はい＞	**発表者の内容** 「記録用紙を通しての担任の先生とやりとり」 **発表者の内容＋ SNS** 「インターネット上での記録方法、LINE グループ」 **全体の内容** 「指導記録・受講児童の成長過程の記録は必要」
＜いいえ＞	「途中退出したため」

3 回目は 10 件で＜はい＞が 8 件、＜いいえ＞が 2 件であった。

表 22：3 回目の触発性の選択肢別内容

選択肢	理由
＜はい＞	**発表者の内容** 「前半の発表者の活動内容」 「小学生には楽しく」 「テストの点数を伸ばす」 「反面教師」 **参加者の発言** 「ICT の活用」 「書籍の紹介」 **小グループでの参加者の発言** 「子供が先生に気に入られないといけないと思っている」 **その他** 「実際に活動している人」
＜いいえ＞	「触発される内容はなかった」 「自己都合で集中して聞けなかった」

1 回目は、発表者と、コアメンバーである参加者[20] の発言に触発を受けている。発表者からは「オンライン指導のメリット・デメリット」「ICT の活用」と具体的な内容があがっている。特別なコアメンバーからの、CLD の子どもへの日本語指導のあり方の情報が触発になっている。「色々な立場の人」の存在もあがっている。

2 回目は、発表者、全体の内容、LINE があがっている。発表者からは「記録用紙を通しての担任の先生とやりとり」「インターネット上での記録方法」とやはり具体的な内容があがっている。

3 回目までくると、触発を受けているものの種類が増え、発表者、参加者、小グループ内の

20）このコアメンバーは、多くの参加者から、子ども支援の質、量、どちらの面から見ても豊富な知識と経験を持っていると認識されている。

参加者[21]、「実際に活動している人」となっている。その内容も発表者の「小学生には楽しく」「テストの点数を伸ばす」ことで子どもの学習意欲が上がるという情報も注目され、また「反面教師」のような自分で内容を捉え直す言及もある。全体場面での参加者からの情報も触発となり、さらに、小グループ内での「子供が先生に気に入られないといけないと思っているということ」という小さな情報も敏感に受け取るようになる。このように、受け取る内容が多様化し、受け取り方も敏感になっている。一方、「触発される内容はなかった」という指摘もある。

回を重ねるごとに、触発を受ける対象として幅広い参加者や内容が挙げられ、受け取り方の感度の高い回答も増えている。ワークショップの参加者は毎回同じではないため即断はできないが、各回の参加者の参加態度は概ね変化していると言えそうである。

7. LINE での活動

第 1 回のワークショップ後、イベント情報をメンバーに伝えて欲しいという依頼が筆者のところに来た。こちらが把握している全メールアドレスにイベントのチラシや情報を送った。これは旧ネットワークでも行っていた作業である。しかし、本研究を進めるにあたって、この作業がメンバー間で自由にできるようになることが望ましいと考えた。コアメンバーで話し合い、色々なソーシャル・メディア・プラットフォームの検討がなされた。誰もが無料で手軽に利用でき、アップされた情報が長く記録されるものが良いのではないかということで、LINE を選択することにした。

2024 年 2 月 18 日の第 2 回ワークショップの際、参加者に LINE グループへの参加を勧めた[22]。

多少の出入りがあったが、結果的に、12 名が LINE のグループに入ることになった。2025 年 1 月末日現在もメンバーの変化はなく 12 名で続けられている。

2025 年 1 月末日までで、メッセージは全 123 を数えている。中身は当初、自己紹介やそれに対する応答があった。その後は、イベントのチラシ、新聞記事、資料などをあげての情報提供が多かった。それらに対しては、応答がそれぞれになされたり、リアクションの絵文字で反応を示したりしていた。その他、近況報告などの情報提供もあった。質問などの情報要求、また依頼、勧誘、提案（内容により共同行為要求や単独行為要求のどちらか）もあり、相手の反応を直接求めていた。それらに対しても応答がなされており、メッセージのつながりが認めら

21）書かれた内容を誰が言ったものであるか音声データで確認し、全体の活動での参加者と、小グループ活動での参加者とに区別した。

22）その際、次のように説明した。LINE のグループを情報交換のツールとして立ち上げる。皆が情報発信、情報共有ができる手軽なツールである。トークのメッセージ・写真・動画・URL は期限なく保存される。ただし、PDF や WORD 文書はファイルに保存しても期限が切れると削除されるので、写真を撮って貼るのが良い。

れた。このつながりの数で言うなら、30 ほどの話題があった。毎月[23] 誰かしらのメッセージがあげられ、反応があった。特に筆者が、情報要求（質問）をした際に、11 のメッセージが連なり、必要な情報が複数得られたことがあった[24]。この LINE が機能していると印象付けられた例である。

12 名のグループ登録者のうち、実際にメッセージの書き込みを行っているのは 6 名である。その内 5 名[25] が、最初の発信者となり、様々な情報提供や、依頼、勧誘、提案などを行っている。

各回のワークショップ以外の、日常的につながる、情報交換のできるツールとして一定の機能をしているといえる。

8. 参加者の変化

各回の事後アンケートは、最後に「もし差し支えがなければ、お名前をご記入ください」とあり、任意回答になっている。3 回ともアンケートに名前を記入した人が 2 名（A、B）いる。また、3 回とも参加しているが、アンケートには 2 回記名した人が 3 名（C、D、E）いる。この 5 人の回答を分析する。分析する項目は全体で見て時間軸で変化が示唆される 2 項目である。

1 回目

4）今日のワークショップに、ご自身は積極的に参加できましたか（言いたいこと、聞きたいことを話せましたか）。

2 回目以降

4)”ブレイクアウトルームでの話し合いに、ご自身は積極的に参加できましたか（言いたいこと、聞きたいことを話せましたか）。

8）今日のワークショップ内で、他の方の発言に、触発されたことはありましたか。

4)、4)”の積極性は、ワークショップへの関わり方の度合いが分かる項目である。8）触発に関することは、ワークショップから受け取るものの有無が分かり、やはりワークショップへの関わり方の度合いが分かる。

23）2024 年 4 月だけは、誰からもメッセージがなかった。
24）簡単な質問ではなく、背景を尋ねる複雑な問いであった。
25）5 名のうち、コアメンバーは 2 名である。

表 23：A の結果

	積極性　選択肢 「理由」	触発　有無 「内容」
1 回目	**普通** 「発言するのが簡単ではなかった（何を話せばいいか分からない）」	**はい** **参加者の発言** 「文法を体系的にではなく、必要な時に適宜教える」
2 回目	**とてもよかった** 回答なし	**はい** 回答なし
3 回目	**とてもよかった** 「自分の実践が話せた」	**はい** **発表者の発言** 「テストの点数を伸ばす」

表 24：B の結果

	積極性　選択肢 「理由」	触発　有無 「内容」
1 回目	**普通** 回答なし	**いいえ** 回答なし
2 回目	**とてもよかった** 「方向性を整理できた」	**はい** **全体の内容** 「指導記録・受講児童の成長過程の記録は必要」
3 回目	**普通** 「内容に新鮮味がなかった」	**いいえ** 「特にない」

表 25：C の結果

	積極性　選択肢 「理由」	触発　有無 「内容」
2 回目	**とてもよかった** 「ファシリテータの適度な答えやすい声掛け」	**はい** **発表者の発言** 「記録用紙を通しての担任の先生とやりとり」
3 回目	**とてもよかった** 「（大学の先生から）入試の採点基準や漢字の必要紙性を聞けた」	**はい** 発表者の発言 「小学生には楽しく」

表 26：D の結果

	積極性　選択肢 「理由」	触発　有無 「内容」
1 回目	**あまりよくなかった** 「発言するのが簡単ではなかった（Zoom になれなかった）」	**はい** 「色々な立場の人の存在」

2 回目	**普通** 回答なし	**はい** **発表者の発言＋ SNS** 「インターネット上での指導記録、LINE グループ」

表 27：E の結果

	積極性　**選択肢** 「理由」	触発　**有無** 「内容」
1 回目	**あまりよくなかった** 「時間が不足している」	**はい** **参加者の発言** 「易から難の文型積み上げは子供では行わない」
3 回目	**とてもよかった** 「感想や疑問を話すことができた」	**はい** 「実際に活動している人」

1 回目のワークショップにはブレイクアウトルームに分かれての小グループ活動がなかったため、単純に 1 回目を、2 回目、3 回目と比較することはできない。しかしながら、積極性の回答の文言を見てみると、A の 3 回目「自分の実践が話せた」、B の 2 回目「方向性を整理できた」、C の 3 回目「（大学の先生から）入試の採点基準や漢字の必要紙を聞けた」、E の 3 回目「感想や疑問を話すことができた」と記述されており、D 以外は自分の興味関心の深まる内容の回があった。またそれは 3 回目に多く出ている。このような積極性が上がった参加者がいることが、ワークショップの評価にも関わっていたのではないだろうか。

触発の有無も、B 以外は、ほぼ全員が全回に「はい」を選び、内容も記述している。発表者、参加者、「色々な立場の人の存在」「実際に活動している人」など、触発を受けている人は様々であるが、学習に関わる何らの触発を受けている。さらに、全体の内容や SNS グループも触発を受けるものとなっている。

加えて、積極性に書かれている内容であるが、B の 2 回目「方向性を整理できた[26]」、C の３回目「大学の先生から入試の採点基準や漢字の必要性を聞けた[27]」は積極性というより触発を受けたととれる内容である。

ワークショップの中で、A、B、C、D、E の全員がそれぞれに多様な触発を受け、言語化している。前述の杉山ら（2020）が指摘するように、この項目が、参加者の興味の深まりに関与している可能性がある。そして、そのことが 3 回続けての参加につながった可能性もある。

26）実際に書かれた内容から読み取ると、発表者と小グループの参加者から触発を受けたと考えられる。
27）これは小グループの参加者から触発を受けている。

9. 結論

1. はじめに で示した問いに立ちかえり、データ分析結果と今一度照らし合わす。

1)「強制性のない、ゆるやかな関係性」と「持続可能なつながり」は、どのような実施形態で可能なのか。一定の会を開催するとしたら、頻度、活動時間はどれ位なのか。

・地理的、かつ時間的な問題を解決するため、Zoom 開催のワークショップを行った。
・ワークショプには、小グループ（ブレイクアウトルーム）に分かれての話し合いも入れた。
・頻度は半年に一回、活動時間は 90 分とした。
・LINE のグループも立ち上げ、ワークショップ以外の日々の情報交換の場も設定した。

全て事後アンケート結果などから、コアメンバーで話し合い決めた形態である。このような実践が一定の成果をみせ、継続している。よくある形態ではあるが、事後アンケート等により裏付けられたものであることに注目したい。持続可能なネットワークとして、一つの良い事例となろう。

2）ネットワークのメンバーは、ネットワーク間で、どのような「人工物（子ども支援活動に関する、情報、教材、指導の工夫など)」の共有を望んでいるのか。

参加者がワークショップで扱って欲しい内容は学習に関わるものが多数出てきた。学習に関する情報や指導の工夫である。具体的には多様なテーマが望まれており、参加者達の興味関心の幅が広いことがわかった。学習に関わるものの中の特別な何かに集中してはいなかった。

3）それぞれの興味の深まりに関与するという「刺激的な隣人」とは、どのようなものを持つ、どのような人なのか。

本稿では、「刺激的な隣人」を「触発されたこと」と同義と扱う。最初は「刺激的な隣人」は発表者、コアメンバーである経験の豊富な参加者、と限定的であったが、だんだんに刺激を受けている人･ものが幅広く多様化している。また受けとり方も自分で捉え直すなどしており、感度が上がっている。どのようなものを持つ、どのような人なのかという問いは、当初、固定的なものを想定していた。しかし、ネットワークが継続すれば、参加者は変化し、多様なものから様々な刺激を受けるようになっている[28] といえよう。

10. 終わりに

まだ歩み始めて 2 年であるが、持続可能でゆるやかなネットワークは一定の成果を見せ、活性化され継続している。参加者の変化も見られ始めている。ただ、これまでのワークショップは、コアメンバーが裏で支えながら展開しているという言い方もできる。しかしながら、LINE グ

28）毎回扱うテーマが違うので、そのために変化が起きている可能性もある。今後の変化を見ていきたい。

ループは、コアメンバー以外の参加者が活躍し機能している。今後、ワークショップをも支える側に加わる参加者が出てくるだろうか。このワークショップを軸としたネットワークがどのように変化していくのか。今後の展開を期待したい。

本研究は、「CLD 児童・生徒を支える、ゆるやかで、持続可能なネットワーク構築を目指して」（令和 4 年度～令和 6 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）課題番号 JP22K00634　研究代表者：山﨑けい子）の助成を受けたものである。

参考文献

杉山昂平・森玲奈・山内祐平（2020）「アマチュア写真家の興味の深まりにおける実践ネットワークの関与」『日本教育工学論文誌』43（4）、381-396

山﨑けい子（2024）「CLD 児童・生徒を支える持続可能なネットワークとは：インタビュー調査から分かること」『富山大学人文科学研究』第 80 号、31-42

山﨑けい子・中河和子・田上栄子（2011）「外国籍年少者のための日本語学習環境デザイン（2）―散在地域支援モデルの試案―」『富山大学人文学部紀要』第 54 号、27-40

山﨑けい子・深澤のぞみ・中河和子・田上栄子（2009）「外国籍年少者のための日本語学習環境デザイン―散在地域の学習を支えるために―」『富山大学人文学部紀要』第 51 号、1-15

BROWN, J. S. and DUGUID, P.（2001）Knowledge and organization: A social-practice perspective. *Organization Science*, 12（2）: 198-213

WENGER, E.（1998）*Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity*. Cambridge University Press, Cambridge

WILLSON, M.（2010）Technology, networks and communities: An exploration of network and community theory and technosocial *forms. Information, Communication & Society*, 13（5）: 747-764